

色彩浮造り合板で新製品～家具「IRO」シリーズの商品化～

技術部 製品開発グループ 松本久美子

■ はじめに

道総研林産試験場では、北海道の人工林に生育するトドマツやカラマツなどの針葉樹材に関する研究開発を行っています。針葉樹材は現在、住宅の壁材などで隠される構造材や梱包材など、人の目につかない個所に使われることがほとんどですが、これを住宅の内装材や家具材など、身近な材料に使っていくための製品開発を行っています。

その一環として開発された色彩浮造り合板とその製品提案について林産試だより 2009 年 7 月号で紹介しました。

(<http://www.fpri.hro.or.jp/dayori/0907/3.htm>)

その後、色彩浮造り合板は、旭川市内の建具メーカーに技術移転をして家具「IRO」シリーズとして商品化されることとなりました。今回は、商品化に至るまでの経緯と「IRO」シリーズの紹介をします。

■ 商品化に向けて～色彩浮造り合板の開発～

「IRO」シリーズの商品化に先立ち、平成 18 年度、財団法人科学技術振興機構より研究助成を受け、「IRO」の素材となる色彩浮造り合板を製造するための基礎的技術の開発を行いました。

平成 19 年度には、これを素材とした製品開発に対して、トステム財団より研究助成を受けることとなりました。

色彩浮造り合板を製品として市場に送り込むのであれば、民間企業との連携が不可欠であることや、色彩浮造り合板の性質や製法を考慮すると大量生産よりも少量多品種的な使い方が向いているであろうと考えられます。また林産試験場のある旭川市が全国でも有数の家具の産地であることから、建材のほかに家具での製品化を視野に入れながら民間企業との連携を模索しました。

そして平成 20 年、デザインを(有) Y. IMAGINE、製作を(有) 杏和建具という連携体制を構築して開発した製品の中から、オープンシェルフ「IRO」(写真 1)が、

(有) Y. IMAGINE が中心となって応募した Interior Pro Ex Co 2008 デザイナーズ・ショーケースにおい

て大賞受賞という栄誉を受けることが出来ました。色彩浮造り合板開発から 3 年目のことでした。



写真1 オープンシェルフ「IRO」

■ 商品化に向けて～「IRO」シリーズの開発～

その後は、(有) 杏和建具が中心となって(有) Y. IMAGINE とともに商品化が進められました。

平成 21 年度には(有) 杏和建具が、旭川市の企画する「ものづくりもうひと押し支援事業」から助成を受けることが出来ました。そうした地元からのバックアップが商品化に向けての大きな推進力となりました。この事業の中で、「IRO」シリーズとなる様々な家具がデザイン・試作されました(写真 2～6)。



写真2 リビングテーブル (Y. IMAGINEデザイン)



写真3 ドレッサー (Y. IMAGINEデザイン)



写真4 ボックス (Y. IMAGINEデザイン)



写真5 ディスプレーケース (Y. IMAGINEデザイン)



写真6 虹色テーブル (杏和建具デザイン)

写真では、着色により強調された木目模様が目が惹かれますが、実物はその木目に沿って浮造りの際に生じる凹凸がついており、写真よりも深みや陰影のある外観に仕上がっています。

受賞したオープンシェルフは林産試験場のロビーに展示してありますので、興味を持たれた方は実物をご覧ください。また、今回紹介した写真の家具について

は、旭川市の(有) 杏和建具にお問い合わせください。

(有) 杏和建具 <http://kyowa-tategu.com/>

(有) Y. IMAGINE <http://www.y-imagine.com/>

■ おわりに

“北海道のトドマツやカラマツで人に身近な家具材や内装材が作れないか”ここからスタートした研究開発が民間企業との連携を通して、色彩浮造り合板とそれを素材とした「IRO」シリーズという形となって実を結びました。これは、研究機関の知見やシーズとなる基盤技術の蓄積、民間企業の技術力やデザインに加え、財団や地元行政などの多くのバックアップがあって成立したものです。

「IRO」シリーズを目にする方々が、そのことやさらに発想の源となったトドマツやカラマツという北海道の森がはぐくんだ豊かな森林資源にも思いをはせていただければ、開発担当者として幸いですし、木の温かみや可能性を感じられる製品として普及していくことを願っています。